

第2章

四国のスピリチュアル・ツーリズム

大賀 陸夫

1. はじめに

お遍路をスピリチュアル・ツーリズムと呼んでみたが、そういうことばが、一般に使われているわけではない。しかし、最近、香川のある霊場で、観光バスで巡っているお遍路さんの団体に遭遇したとき、スピリチュアル・ツーリズムということばが自然に心に浮かんできた。そして、これこそ現代のお遍路さんをもっとも適切に表現することばではないかと思いついたのである。

真新しい白装束に身を包んだ、いかにもにわか仕立てのお遍路さんたち。60歳前後のご婦人が大多数であった。仲間との団体ツアーを大いに楽しんでいる様子である。どこかの宗教組織の信者さんたちという印象はない。これはやはり観光旅行なのだろう。しかし、物見遊山の観光旅行ではもちろんない。先達さんに倣って般若心経も唱える。特定の宗教団体のメンバーではないが、なんらか神仏に触れるような体験をしたいと思っている人たちであろう。これが、スピリチュアル・ツーリズムということばがふさわしいように思われた理由である。

また、遍路の装束とはいえ、このような現代のお遍路さんを遍路と呼

第2章

んでいいのだろうかという気持ちもある。現代のお遍路さんは、清潔で、おしゃれで、遍路ということばで連想する哀愁がほとんどない。大正時代に遍路をした高群逸枝は、遍路を「灰色の敗残者」と表現したように、¹ 遍路とは、かつては生活に困窮した人たちのひとつの生き方であった。もちろん、古い時代のお遍路さんも、現代のお遍路さんも、巡礼という意味では同じお遍路さんなのかもしれない。しかし、お遍路さんも変わったという印象は否めない。これも、むしろスピリチュアル・ツーリズムということばがふさわしいように思われた理由である。

ところで、最近はお遍路ブームだときく。とくに歩き遍路が増えたことが注目されている。歩き遍路が増えたのは、いかなる理由によるのであろうか。そういえば、巡礼の増加は、かならずしも日本だけの話ではないようである。ヨーロッパの有名なサンティヤゴ・デ・コンポステラの巡礼も増加しているらしい。そして、そのように共通する現象の背景には、やはり共通する理由があると研究者は指摘している。²

物質主義の現代社会は、人間の根源的欲求にこたえることができず、満たされない思いをいだいている人たちが、人生の意味を探しながら歩いているのであろうか。現代のお遍路には、スピリチュアル・ツーリズムといえるような実態があるのかどうか。それを検証してみたいという思いが強くなってきた。これが本稿の課題に取り組んだときの問題意識である。つまり、遍路動機に焦点をあてて、遍路（主として歩き遍路）の実態を調べてみたいということである。

¹ 高群（2004）、126ページ。

² 関哲行は、「日本と同様に、ヨーロッパでもイスラム世界でも、巡礼への関心が着実に高まっているのである。しかしこれは偶然の符合ではあるまい。生産と労働、成長と発展を基調としたヨーロッパ近代の伝統的価値観の動揺と深く関わっていると見るべきであろう」と述べている。関（2006）、8ページ。

II. お遍路体験記

高群も書いているが、歩き遍路は毎日がドラマである。現在でも、そう述懐するお遍路さんは多い。だから遍路日記をまとめるとそのまま物語になる。また、歩き遍路は、実践した人にとって、忘れられない経験になるらしい。そういうこともあってか、自費出版も含め、かなりの数のお遍路体験記が刊行されている。それらの書物では、遍路動機はどのように記されているか見てみたい。

小林淳宏『定年からは同行二人』（1990）は、定年でお遍路を始めようとする人にとって人気の高い書物である。著者は、四国では遍路動機を尋ねることは礼儀に反するという考えが広がっていると指摘した上で、自分自身については次のように述べている。「私の場合、定年退職がきっかけだった。それまで三十数年勤めていた会社をやめた時の解放感、日本が負け、軍隊から故郷に引き揚げた時に若干似ている。・・・軍隊も会社も家族も組織である。その組織を離れた時の解放感と『自由になった』という気分を味わいたいために私はお遍路に出た」。³ お遍路に出る時に決めた目標は、最低「歩き通す」こと、そして「禁酒」「禁煙」も付け加えた。しかし「仏教とか真言宗などの信仰については無知の上、別になんの希望も寄せていなかった」という。⁴

このように、遍路は「自由を味わう」ためであり、宗教とは無縁の動機で始まったという。しかしながら、お遍路体験記の最後は、意外にも「宗教的」体験の記録で終わっている。彼によれば、結願の瞬間に「法悦」を味わい、喜びのあまり流れ出す涙を抑えることができなかったという。著者自身が「法悦」ということばを使っていることが注目される。

若者の体験記では、人気格闘家・須藤元気の『幸福論』（2005）が興

³ 小林（1990）、26-27ページ。

⁴ 同上、27ページ。

第2章

味深い。タイトルは『幸福論』であるが、これはお遍路体験記である。遍路を始める動機として、彼は、「人間的成長を遂げようという思いが強くなってきた」あるいは「歩き瞑想をしてみたかった」と述べている。⁵ 歩き遍路の最中、高知で、竜馬の「剣術なんて、勝っても愚劣、負けても愚劣。こんなものに100年明け暮れても世も国も善くはならない」ということばに接し、格闘家として考えさせられる。「格闘なんて、勝っても愚劣、負けても愚劣」と。歩きながら、“We are all one.”について考え、幸福について思索をめぐらす。彼は言う。「アランの『幸福論』にこういう一節がある。『成功しているから満足しているのではなく、満足していたから成功したのだ』。これは『成功』を『幸福』に置換えても同じことがいえる。幸福だから楽しいのではなく、楽しんでるから幸福なのだ」。このように、遍路は人を哲学者にするものらしい。また、須藤のユニークなところは、お遍路にカウンターを持参し、「ありがとう」を言った回数を数えるという行為である。彼によると、その回数は210,090回にのぼったという。このように、「人間的成長」を願って、「歩き瞑想」をし、「われわれはすべてひとつ」を確認し、21万回もの「ありがとう」を唱える。それは宗教的体験といってもよいのかもしれないが、彼はそれを宗教とはいわない。

本になったお遍路体験記は他にもたくさんあるが、心の深層に関わる体験という意味で、宗教的体験をしていても、いずれもそれを宗教だとはいわない。『娘巡礼記』は愛の悩み、ごぜ三味線演奏家、月岡祐紀子の『平成娘巡礼記』は芸の悩みが遍路の動機だった。月岡は、「目をつぶすことはできないが、せめて途方に暮れる旅にでよう。その旅のなかで、ごぜ三味線をひいてみたいとおもったのだ」と動機を語り、⁶ 最後

⁵ 須藤 (2005), 9ページ, 11ページ。

⁶ 月岡 (2002), 16ページ。

に「歩いていて、何人もの今まで知らなかった自分に出会えた」とお遍路の体験を述べている。⁷石山未巳『幸せはどこにある：白血病を宝に変えた歩き遍路』（2002）は、お遍路によって、かけがえのない真理と信仰を得たというが、「信仰とは、宗教と別のもので、私個人の中にあるものである」といい、宗教を否定する。⁸

歩き遍路の体験記を見るかぎり、お遍路は、人生の転機、自分探し、人間的成長など、心のもっとも内奥に関わる動機で始められている場合が多い。そして「生かされている」、「われわれはすべてひとつ」と悟ったり、法悦を体験するなど、宗教的といってもおかしくない経験をしている。しかし、多くのお遍路体験記が、宗教的動機、宗教的体験であることを否定している。

III. 遍路の学術的研究

次に、四国遍路に関する研究書では、現代の遍路動機は、どのように論じられているかみていくことにしよう。

佐藤久光『遍路と巡礼の社会学』（2004）では、1996～97年の一年間に、愛媛県第56番札所で1272人に対して行われた調査に基づく「四国遍路の実態」が紹介されている。⁹調査対象はお遍路一般で、歩きに限定されているわけではない。遍路の特徴は次のとおりである。地域別では、四国出身者が多い。男女別では女性の方が多い。年齢別では60代がもっとも多い。本稿で取り扱っている遍路動機は、「信仰心にもとづいて」がもっとも多く、35.4%である。しかし、「信仰心にもとづいて」の数値は、1969年は52.3%であったので、昔と比較すると「宗教動機」はか

⁷ 月岡, 220ページ。

⁸ 石山 (2002), 7ページ。

⁹ 佐藤 (2004), 213-236ページ。

第2章

なり減少していることがわかる。これに対し、近年増加しているのは、「精神修養のため」であり、これは1969年の5.2%から、1996～97年は14.7%に伸びている。精神修養は宗教の一要素でもあるが、ここではスピリチュアルな動機ということにしたい。そのようなスピリチュアルな動機が増えていることがわかる。

以上の結果は、後で述べる歩き遍路の実態と重なるところもあるが、異なるところもある。とくに、動機・目的別では、減少しつつあるとはいえ、「信仰」すなわち宗教動機がもっとも多いことが注目される。お遍路さんの大部分は、自家用車やバスなど乗り物を利用する人たちであるが、そのような人々も含めたお遍路さん一般でいえば、お遍路の動機は今なお宗教が一位である。歩き遍路の体験記では、宗教動機はほとんどないので、宗教動機をあげないのは、とくに歩き遍路に特徴的なことかもしれない。

星野英紀は『四国遍路の宗教学的的研究』（2001）において、「現代歩き遍路の体験分析」を行っている。歩き遍路の数を正確につかむことは困難であるが、歩き遍路が増加の一途であることは確かであるという。そして、その背景にあるのが、現代の「ウォーキング・ブーム」であることを指摘する。¹⁰歩き遍路の動機については、インタビュー調査から6人のケースを紹介している。「会社のリフレッシュ休暇がきっかけ」、「歩くことが好きだから」、「定年を機に」、「達成感を求めて」、「自信をつけたい」などの遍路の動機を紹介して次のようにいう。「現代の歩き遍路のかかりの人々に共通していることの一つは、四国遍路に出る動機は信仰からではないということの明言、断言である」。¹¹ また、最近増加している歩き遍路は、定年前後のサラリーマンや若者であり、「かれらが従来の遍路とは違うタイ

¹⁰ 星野（2001），355ページ。

¹¹ 同上，361ページ。

四国のスピリチュアル・ツーリズム

プの人々であることは、札所寺院関係者、遍路関連産業の人々がこぞって指摘するところである」という。¹²しかしながら、彼らの体験談を注意深く読む限り、現代の歩き遍路が「無信仰であるとか信仰体験と無関係であるとは言いきれない」ともいう。というのは、歩き遍路の人たちが、「読経の間に一気に異界に没入するような感覚に陥る」、「欲を捨て、すべてに優しく、感謝の気持ちを持って生きることが大切だ」、「＜生きている＞のではなく、＜生かされている＞のだ、という認識」、「危険な目に遭ってもなんとかあったのは、お大師様のお陰」などの記述や発言をしているからである。星野は、これらの表現が、宗教の信仰者のことばとさほど変わりがないこと、にもかかわらず、遍路者たち自身は、これらの体験を「宗教体験」であるとは認めていないことを強調している。歩き遍路は宗教的体験をしているにもかかわらず、それを宗教的体験とは言わない人々である。ただ、この研究は量的な研究ではないので、この結論が、他の歩き遍路にどこまであてはまるのか定かではない。

森正人は『四国遍路の近現代』（2005）において、歩き遍路によって得られる「癒し」効果や、歩き遍路の「自分探し」動機はマスメディアによってつくられたものであると論じている。¹³ 1990年代半ば以降、四国遍路は癒しや自分探しと結びつけてマスメディアによって紹介されてきたという。ただし、実際に癒し効果があるのか、自分探しで歩く人が多いのかといったことについては考察の対象にはなっていない。

以上、最近の研究からわかることは、遍路全体でいえば、宗教動機が減少しつつある反面、「精神修養」というスピリチュアルな動機が増加しているということである。また、歩き遍路では、宗教体験に近い体験をしながら、それを宗教体験とはいわない傾向があるようである。その

¹² 星野、365ページ。

¹³ 森（2005）、269ページ。

第2章

ような歩き遍路の増加には、マスメディアの役割があずかって力があつた。スピリチュアル・ツーリズムといえそうな傾向が遍路全体にうかがわれるが、とくに歩き遍路にそれが顕著であるように思われる。

IV. スピリチュアリティ

さて、これまでスピリチュアル・ツーリズムということばをやや曖昧に使ってきたので、ここで、スピリチュアルの意味するものについて少し論じておきたい。スピリチュアリティは日本語でいえば霊性であり、鈴木大拙にならって、「精神の奥に潜在しているはたらき」と定義しておきたい。¹⁴ 人間に、身体と精神があることはだれしも認めるが、さらに精神の深層に霊性という領域があるかどうかについては、見解は分かれる。しかしながら、英語にはsoul, mind, body, ラテン語には, anima, mens, corpusということばがあり、わが国には霊(魂)、精神、身体ということばがあるのだから、どんな社会においても古来、そういうレベルが存在することを認めてきたわけである。ただ、デカルト以降の近代においては、心身の統一的・根源的な支配原理としての靈魂は認められなくなってしまった。¹⁵ しかし、近年、WHOが、健康の定義を「身体的、精神的、社会的に安寧の状態」から「身体的、精神的、社会的、および霊的spiritual にダイナミックで安寧の状態」に改める提案をしたように、精神のさらに高次のスピリチュアルというレベルの存在が、世界的に承認されつつあるのが現代の状況といえる。

精神の深層であるスピリチュアル・レベルは宗教レベルといってもよい。鈴木大拙が「宗教意識の覚醒は霊性の覚醒」であると述べたように、¹⁶

¹⁴ 鈴木(1968), 24ページ参照。

¹⁵ 高橋(2007), 26ページ参照。高橋は「霊性とは、デカルト以降の近代西欧思想が見失った, anima やvoluntas の復権なのである」という。同, 33ページ。

¹⁶ 鈴木(1968), 24ページ。

四国のスピリチュアル・ツーリズム

本来、宗教とは靈性の覚醒によって、靈的真理を把握し、それを信じることであるはずである。しかしながら、今日、宗教はそのようにはみなされてはいない。既成教団によってつくられた超越的存在に関わる教義を、理解できなくても信じること、つまり盲目的信仰が宗教である。そう理解している人たちが多いのではないだろうか。

そこには形骸化してしまった現代の宗教の問題がある。宗教といえは、教団のメンバーになること、教義を信じること、宗教儀式に参列すること、教祖への絶対的帰依などが連想される。大拙は靈性の経験こそ宗教意識なのだというのが、それは宗教ということばでイメージされることが少ないのが現実である。宗教ということばは、宗教的権威や宗教的権力を強く想起させる。そして、靈的覚醒、新生（再生）、悟りといった宗教経験は、宗教というよりスピリチュアルな経験と理解される傾向があるようである。

宗教がそのように理解されているため、宗教イメージは低下する一方であるが、人間に宗教的レベルが存在するかぎり、宗教的なものをなくすことはできない。したがって、「宗教」が地盤沈下すればするほど、「スピリチュアル」なものへの関心はますます高まるという図式になるのであろう。

宗教学者・島蘭進は、現在、「新靈性運動」と呼ぶべき新しい運動が、グローバルに展開していると主張している。「新靈性運動」にはいろいろな運動群が含まれるが、その特徴の一つは、これらの運動が伝統的宗教の後に来たものであるという自覚であるという。『『宗教』の時代が終わり、新しい『靈性』の時代が来たという意識がこれらの運動群の基調の一部をなしている』。¹⁷そして彼は、それを証明する事実として、アメリカの宗教意識調査を紹介している。アメリカのニューエイジの代表的

¹⁴ 島蘭 (1996), 50ページ。

第2章

雑誌『心・からだ・霊』誌の600人の読者を対象とする調査では、「宗教」と「霊性」が異なると答える人が79%に上るという。また、自らを「宗教的」と答える人は40%にすぎないが、自らが「霊性的」と答える人が94%にのぼる。¹⁵わが国においても、「宗教団体は好まないが、『霊性』や『精神世界』の探求・育成に取り組む、個人主義的な求道者が明らかに増大している」という。¹⁹また、島藺はこのような新しい運動の中心テーマは「自己変容」とであると指摘している。

このように「宗教はもっていないが、スピリチュアルなものを求めている」人が増加しているのは、グローバルな傾向のようである。古来、巡礼とは「新生」の体験を得る宗教行為であったので、そのような人たちが、歩き遍路という伝統的な「宗教行為」にスピリチュアルな体験を求める場を見いだしたとしても不思議ではないように思える。お遍路体験記などを読むかぎりでは、たしかに、島藺がいう「新霊性運動」といえるようなグローバルな傾向が、歩き遍路の増加の背景にありそうなのであるが、実態はどうなのであろうか。次に数多くの歩き遍路の人たちの書き込みを分析して何がいえるか考えてみたい。

V. 歩き遍路の実態

「お遍路の誰もがもてる不仕合」（森白象）という句がある。人には言えない悩みを抱えて歩いているお遍路さんがたくさんいるというのが実情であろう。あえて遍路の動機をたずねないという文化があるのもそのためである。お遍路さんの心中を知ることにはなかなかむずかしいというのが実際のところである。

幸い、徳島県の第12番札所に近い宿泊所に「お遍路情報交換日記」と

¹⁵ 島藺。

¹⁶ 同上、301ページ。

いうものが置いてあり、宿泊した歩き遍路の人たちが、たくさん書き込みをしている。2002年から2007年12月現在までで、大学ノートに7冊、正確に数えてはいないが、約400人が、行程や、お遍路の動機、感想、性別、年齢、出身地などを書いている。書き込みを読んで共感した人がさらに書くという連鎖によって、歩き遍路の内面についての貴重な情報がかなり蓄積されている。この「日記」は、本来、お遍路さん相互の情報交換という趣旨であるが、学術研究の目的に限定するという条件で、宿のご主人の許可をいただき、データをとらせていただいた。その際、個人情報すべて削除し、すべて匿名のデータに変えた。これらのデータから、歩き遍路の実態を推定してみたいと思う。

すべての書き込みから、なんらか、動機や、感想などについて書かれたものを取り出すと、その総数は291になった。これらのサンプルについて、年齢、性別、出身地（現住所）、遍路動機、感想の諸項目について分析してみたい。もちろん正式の統計調査ではないので、厳密には統計的意味はないが、大筋の傾向を知ることができるのではないかと思う。

1. 歩き遍路の年齢構成

歩き遍路の年齢構成は図1のとおりである。60代がいちばん多く、次が20代となっている。近年は「定年になったら遍路をしよう」という人が多いので、60代が第一位となっていると思われる。20代が2番目に多いというのは、やや意外な結果である。大学生など長い休暇がとれる人が多いということであろう。逆に、30代、40代が比較的少ないのは、仕事や子育てでお遍路をする時間的・心理的余裕がないためと思われる。10代が10人もいたのは驚きだった。大学1年生が多いが、高校生のお遍路さんもいる。

第2章

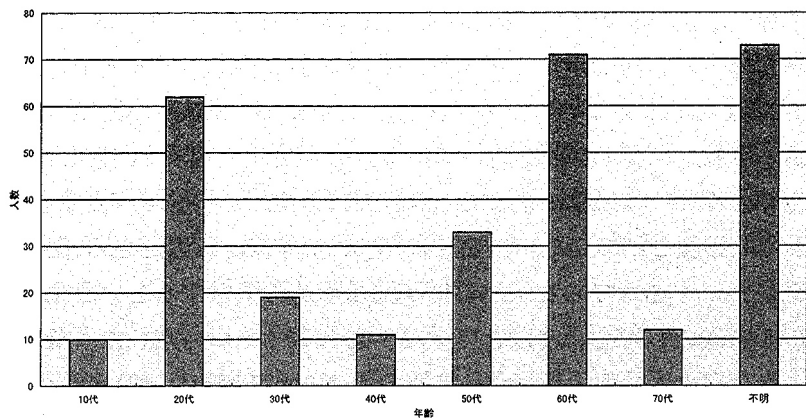


図1 歩き遍路の年齢構成

2. 歩き遍路の男女比

男女別でみると、図2に示したとおり、男189人、女82人と男性が多かった。乗り物を利用するお遍路さんも含めると、お遍路全体では女性の方が多いが、歩き遍路は単独で行動する人が多く、女性より男性が多いようである。

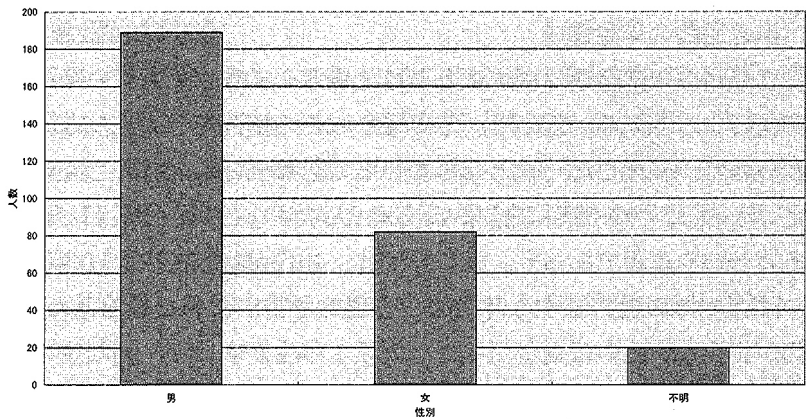


図2 歩き遍路の男女比

四国のスピリチュアル・ツーリズム

3. 歩き遍路の出身地

どこからお遍路に来ているかを調べてみた。この場合「出身地」は現住所とした。たとえば徳島出身であるが、現在東京で仕事をしているという場合は、「関東」の分類とした。図3のとおり、関東が圧倒的に多い。人口が多いところから多くの人々が来ていることがわかる。距離の遠い近いは、あまり関係ないということであろうか。注目すべきは、北海道や東北や九州からも相当数の人々がお遍路に来ていることである。四国遍路は、全国各地の人々を満遍なくひきつける魅力をもっているということであろう。なお、不明に分類した中には、海外からのお遍路さんも一人いた。

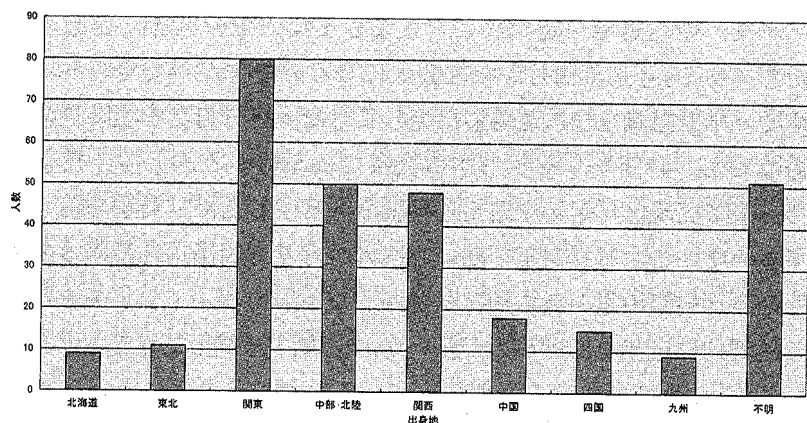


図3 出身地別遍路数

4. 歩き遍路の動機

さて、歩き遍路をする動機の分析に移ろう。動機はさまざまとはいえ、多くの書き込みを読んでいると、おのずといくつかに分類できる。最初に、私はこれらの動機を8に分類してみた。それらは「伝統的信仰」「人生の区切り」「自己変容」「癒し」「夫婦愛」「軽い気持ち」「挑戦」

第2章

「遍路の魅力」である。まず、それぞれの項目を説明しておきたい。

(1) 宗教的動機

願掛け、お礼参り、先祖供養・水子供養などの理由でお遍路をしている人たちをこれに分類した。「僧侶です」という人もこれに含めた。これらは神仏や来世への信頼を前提にした行為と思われるので、宗教的動機と呼ぶことにしたい。「友の病回復の願掛け」、「亡き妻を背中にせおい歩いています」、「お大師様に近づきたい一心で」、「父母の墓前に出発の報せをしてきました」などの動機が含まれる。

(2) 人生の区切り

卒業、中途退職、定年など、さまざまな人生の区切りをあげる人たちである。「来年四月から社会人になるのですが不安でいっぱいです」、「早期退職を機に遍路に出発しました。自分自身を現時点で見つめなおし、時間をリセットする機会ではないかと思う」、「仕事をやめ、夢の実現」、「定年を迎え、再就職もせず、ただひたすら何も考えず歩いています」、「定年を期に心洗のつもりで四国巡礼にやってきました」、「定年の思い断ち切る秋遍路」などがある。

圧倒的に定年をあげる人が多いが、還暦、妻の死などをあげる人もいる。「仕事にあくせく、何やっているんだろうと思った。仕事をやめ、私にとって仕事って何って考えながら歩いています」という若い人の書き込みもあった。

人生の区切りをあげる人は、同時に「自分探しの旅」に言及することが多く、次に取り上げる「自己変容」の項目と密接に関わる場合が多いが、定年や退職や卒業など明確に人生の区切りに言及している人は本項目に分類した。

(3) 自己変容

現状に満足している人がお遍路をすることはあまりないようである。今の生き方に疑問を抱き、不満を感じ、場合によっては自殺を考えるほど自己否定の気持ち強い人たちが、新しい道を見つけないという一心でお遍路をしている。「自分探し」、「自分を変えたいから」という動機をあげる人たちである。「自分の道を考えるため、週末、仕事が休みの日に、お遍路を始めました」、「今まで逃げることばかりの生き方しかしてきませんでした。いつも逃げてばかりのワタシだけど、最後までやりとげたい」、「人に頼ってばかりいる自分がいやで始めた」、「もうひとりのちがう自分を見つけよう」、「変わりたい、人を愛せる人間になりたい」、「自分らしく生きていける自信をもちたい」、「何のために生きているのか、自分は一体何なのか？いまだに答えはみつかりません。この旅できっと何かをみつけない」、「このままではダメだという気持ち、自分も何かをやりとげたいという気持ち、誰かをハッピーにするための強さがほしいという気持ちが、私を四国に駆り立てたんだと思います」、「この旅は自分の弱さに別れを告げる旅です」、「人生観、価値観の軌道修正を図りつつあります」、「苦しい経験が何か変わるきっかけになればと思います」、「これ（遍路）で死んだことにしようと思います。ここから人生やりなおすつもりでいきます」などである。

(4) 癒し

「美しい自然の中を歩くと癒される」という比較的軽い「癒し」について言及する人もあれば、「精神的治療のためにお遍路回りをしています」とはっきり精神的治療を意識して歩いている人もいる。

(5) 夫婦愛

歩き遍路は、一人で歩くというケースが一般的であるが、グループ

第2章

(親子、兄弟姉妹、友人など)でという場合もある。その中で、とくに夫婦で歩いている人たちを別項目にしてみた。「65歳。60歳の愛妻との旅」,「妻と二人の旅。妻と二人で元気で歩けるうちに早めになしとげたいと思っています」などである。新婚旅行でお遍路というケースも二例見られた。「二年前、仕事をやめたときに一人で歩いて感動し、二人でやってみたかったのです。助け合いながら歩く、これからの二人の道かな、と」。「新婚旅行といえば南国のビーチを思い出しますが、それよりぜいたくな四国お遍路通し打ちです。夫婦でお金や名誉より大切なものを見つけられそうです」。

(6) 軽い気持ち

これまで取り上げた遍路の動機は、心の内面に深く関わるものといえるが、遍路をするのにそれほど深刻な理由はないという人もそれなりにいる。たとえば、「友人の誘いで」、「父の誘いで」、「テレビで見て興味があつた」、「私の考えでは金のかかるダイエットです」、「軽い気持ちで」、「ほとんど思いつきで四国に来た」、「なんとなく」、「ただ歩く。信仰心のない僕は読経などできない」、「ウォーキングが趣味なので」などの動機をあげている人たちである。これらの動機は「軽い気持ち」という項目にまとめることにした。

(7) 挑戦

スポーツ感覚で歩いている人たちもいるようである。「自分がどれだけ歩けるか試してみたい」、「動機は決して信仰心からではなく、自分への挑戦からであった。今回も己の気力・体力がどこまで耐えうるのか確認の旅である」、「前にいく人を抜いているうちにおもしろくなり、休憩もそこそこにハイスピードで歩いた」、「日本百名山などを完登。四国遍路を知って、ここもやろうと思いました」といった人たちもいる。

(8) 遍路の魅力

「遍路の魅力」とはわかりにくい分類かもしれないが、何巡もしている人たち、いわば遍路の魅力にとりつかれた人たちである。結願して四国を離れると、もう来ることはないだろうと思いながら、しばらくたつとまた来たくなくなるというのがお遍路らしい。「帰った当日から、また行きたいの念やまず。また来てしまった」、「2回目の逆打ち、順打ちは7回。楽しみながら歩くことを会得した」、「また来てしまいました。歩けることがこんなにうれしいとは」などと遍路の魅力を書いている人もかなりいる。

(9) 遍路動機の分布

これらの各項目の分布を示したのが図4である。遍路動機で多いのは「自己変容」「人生の区切り」「宗教的動機」の順となっている。「軽い気持ち」も相当数あるが、「癒し」に言及する人はあまり多くない。

データに目を通した限りでは、若い人に「自己変容」をあげる人が多いように思われた。また高齢者に、定年など「人生の区切り」をあ

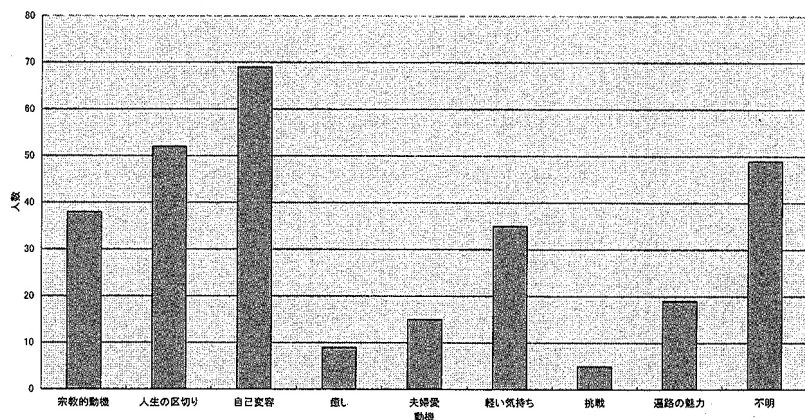


図4 歩き遍路動機（詳細分類）

第2章

げる人が多いという印象であった。そこで、これを確認するために、サンプルを若者（10代、20代）と高齢者（60代、70台）に分けて動機を分析してみた。その結果が図5、図6のとおりである。若者の動機は「自己変容」がもっとも多く、高齢者の動機は「人生の区切り」がもっとも多いということが確認された。主として、若者は自分を変え

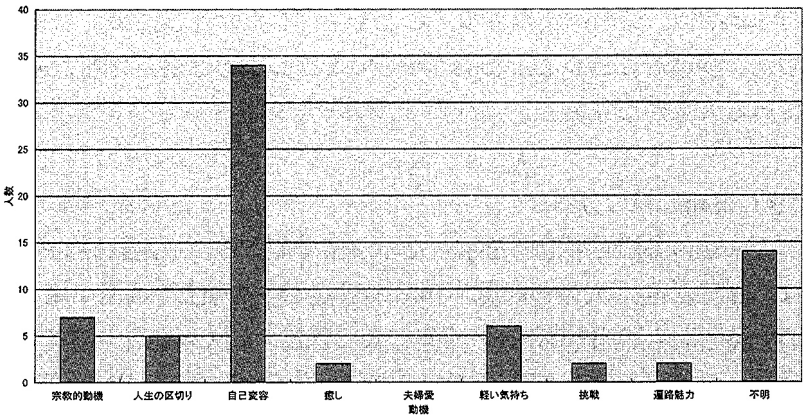


図5 歩き遍路動機（若者）

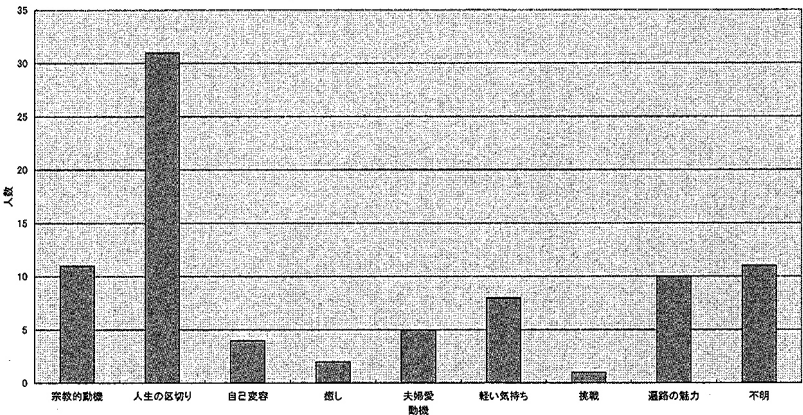


図6 歩き遍路動機（高齢者）

四国のスピリチュアル・ツーリズム

たいという動機で、高齢者は定年後の人生を考えたいという動機で歩いている。

さて、本稿の課題は、スピリチュアル・ツーリズムの実態を検証することであった。そこで遍路動機をスピリチュアルとそれ以外に分けて考察してみたい。上に取り上げた8の動機を再分類する際、「宗教的」動機は、そのままスピリチュアルと区別した項目にしておきたい。上述のとおり、願掛け・お礼参り・供養といった伝統的信仰を「宗教的動機」と呼ぶことにしたい。

上述のとおり、スピリチュアリティとは霊的・宗教的な体験である。そのような意味で、「人生の区切り」、「自己変容」、「癒し」、「夫婦愛」の諸動機を一括して「スピリチュアル」動機と呼ぶことができよう。「人生の区切り」をあげる人は、今後どう生きるかという人生の根源的な問いに、極限まで歩くことによって答えを出そうとしている。「自己変容」はまさしく現代のスピリチュアリティの特徴である。伝統的なことばでいえば「新生」であろう。現代のストレス社会からの救いを求める「癒し」も「スピリチュアル」といってよいであろう。そして「夫婦愛」動機も、夫婦の霊的結合を強化したいという動機と思われるので「スピリチュアル」に分類したい。老後は夫婦でのんびり温泉旅行をという願いとは違った、理想主義的な態度がそこにはある。

「軽い気持ち」と「挑戦」は、宗教的でもなく、スピリチュアルでもないで「非宗教・非スピリチュアル」に分類した。最後に、「遍路の魅力」であるが、これはどちらに分類すべきかわからないので「その他」として別立てで扱いたい。この大分類を図示したものが図7である。ここに明らかなように、歩き遍路の主要な動機はスピリチュアルなものといえる。

歩き遍路は、たとえ区切り打ちであっても、数日間は苦痛に耐えなが

第2章

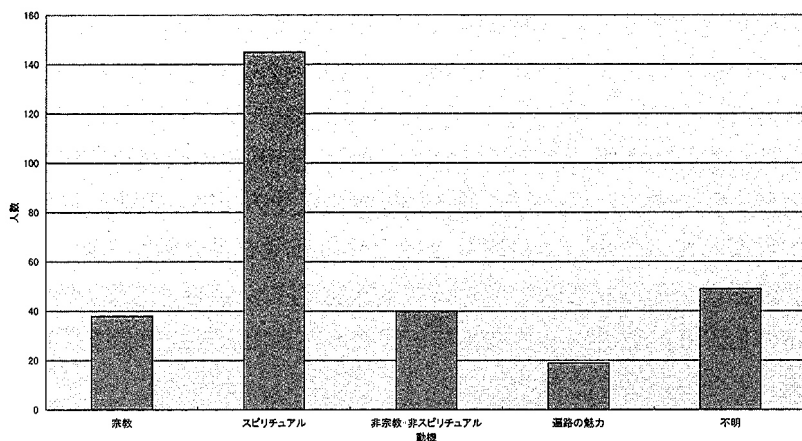


図7 歩き遍路動機（大分類）

ら歩き続けなければならないのであるから、肉体的、精神的に過酷な体験である。その点が、乗り物を利用して参拝するお遍路さんと異なるところである。八十八ヶ所を回るといのは乗り物を利用したとしても、そう簡単なことではないが、歩きとなると、それとは比較にならない苦労がある。したがって、逆に、魂を揺さぶるような体験をしたいと願う人が、「歩き」を選択するのも十分理解できる。歩き遍路にスピリチュアルな動機がもっとも多いというのは、そうした事情があるのではないだろうか。

5. スピリチュアルな体験

次に、歩き遍路をしている人は、どのようなスピリチュアルな体験をしているのか見てみたい。日記の書き込みの中で、もっとも多く見られるのが「感謝」のことばである。291人中58人が、感謝のことばを記している。「出会いに感謝」、「まわりの人たちが温かく、感謝」、「風景、人、出会う全てのものに感謝」、「おいしい夕食、檜風呂、至福の時で

四国のスピリチュアル・ツーリズム

す。感謝」,「自分一人で生きているのではない。感謝」,「この旅を勧めてくれた妻に感謝」,「両親に, 夫に感謝」,「ただ, 感謝の一言」,「生かされている今, 感謝です」,「お接待に感謝」,「今, 生きていることの感謝を日々感じます」,「今まで出会った人すべてに感謝の気持ちを送ります。ありがとう」等々, あらゆるものへの感謝の念が, お遍路さんの心におのずと湧き上がってくるようである。もう少し, 印象深い書き込みを紹介しておこう。

「今回の遍路に導いてくださったお大師様に感謝, 協力・援助してくれた母や妻や娘にも感謝, もう一度自分自身を見つめなおし, ハッピーリタイヤに感謝し, また歩き出そう。人生もお遍路も」。

「ありがとうをこれほど言う日々は, 今までなかった。四国に来て本当によかった」。

「両親が電話で支えてくれた。自分の小ささに気づいた。こんな不都合だらけの自分を育ててくれてありがとう。自分のことを心配してくれてありがとう」(19歳, 男)。

「人間は生かされていることに感謝し, 身体障害者といえどもハンデを感じることはないと思えるようになった」。

「宝探しのようで, とても楽しめている今, 生きていると感じます。朝から親に感謝しました。産んでくれてありがとう」。

「道ばたのお地藏さんに『ありがとう, おかげで進みます』って声をかけて前進しました。すなおにやさしくなれる。これが遍路のよさかな」。

「家族に無理を言って出てきました。行っておいでと背を押してくれた主人や, こっそりリュックの中に激励の手紙を入れておいてくれた娘に感謝でいっぱいです」。

「こんなポンコツも人に愛されているんだなあと思いました。ありがとう。なんか, 今, 生きる意味, つまらなくない!」(20代, 男)。

第2章

「感謝」以外でよく書かれているのが、「生かされている」ということに気づいたという経験である。定年を機にお遍路をしているという人は、「樹木や花や草、風、川の音、鳥の鳴き声、自然の中を金剛杖を手にし、一步一步自分の足をすすめていくと、自分は自然によって生かされていると感じました」と書いている。また、友人を自殺で失ったという青年は「道中、自分はいろんな人のおかげで生かされているんだと実感した。友にもこの感じを味あわせてあげたかった」と書いている。自分で生きているのではなく、自分を越えたより大きな存在から、いのちを受けているということに気づくという人は多い。

「利他の心」もよく言及されている。お接待を受けて、自分もそういう生き方をしたいと思うようになったという人もいる。山道を歩いていて「頓悟」したと書いている人もいるし、「浄土とはこのようなところか」と感じた人もいる。日記にネガティブな感情を書いている人はほとんどいない。感謝、愛、利他の心、生かされているいのちなど、人をポジティブな心にするのがお遍路といえるかもしれない。

東京から青春18切符で来たという人の書き込みを紹介してこの章を終わりたい。「お遍路で学んだこと。①こだわりをやめる。四国の雄大な自然や温かい人情にふれると、こだわっている自分が小さいことがよくわかる。②現在を大切にいきる。③実践の大切さ。④感謝の心の大切さ。自分一人で生きているのではない。現在あるのは両親のおかげ、その両親もまた両親のおかげ。結局、『生きている』のではなく、『生かされている』自分に気づかずにはおれない。⑤利他の心の大切さ。現実生きるわれわれは、いわゆる名利を求めて生きている。自分本位で生きている。これからは『相手の喜びを自分の喜びとする』ような人生を送っていききたいものだ」。

VI. おわりに

遍路は宗教的行為であるが、近年の「宗教から霊性へ」の流れを受けて、だんだん、スピリチュアルな行為と認識されるようになってきた。とくに、最近増加している歩き遍路にそれが顕著である。乗り物を利用するお遍路さんには、まだ宗教的行為をしているという意識があるが、歩き遍路の人たちには、そのような意識はきわめて希薄である。

歩き遍路の人たちは、札所という目的地そのものよりも、そこへ苦労してたどりつくプロセスを重視しているのである。ひたすら歩くという経験、そこで感じたり考えたりする時間をもつことが大事なのである。それは、昔なら宗教者の修行というところであろうが、現在は宗教をもたない人のスピリチュアルな体験と考えられている。

そして、そのような歩き遍路の人たちが増える理由がある。歩き遍路の主要動機は、「自分を変えたい」、「人生の区切りに人生を考え直したい」という願望であるが、それは、現代社会の不安定さ、それに伴う将来への不安、豊かさの反面の生き甲斐の喪失、といったものへのリアクションであるように感じられる。実際、歩き遍路の世界を覗いてみると、そこはあたかも現代社会を写す写真の陰画のようである。まれに、現代社会の第一線で活躍している人がお遍路をしているのを見かけるが、多くの場合、現代社会の日のあたる場所で活躍している人がお遍路に来ることはない。そのような人たちは、お遍路をする暇もない忙しさであろう。そこに集まっているのは、定年退職した人たち、人生の途上で何らかの挫折を経験した人たち、まだ進路の定まらぬ若者、そういった人たちである。あたかも現代社会の表と裏のような印象を受ける。

しかし、そこは決して暗い世界ではない。その逆である。そこは、真の自己を発見する場所であり、親切・感謝・利他の心に溢れた健全な世界である。問題を抱えているのは、むしろ繁栄している日常生活の方であろう。おそらく、われわれは、ときどき日常生活から離れて、心の深

第2章

奥に出かけて行って「心洗い」をする必要があるのだと思う。そのような体験をする機会の一つとしてお遍路はあるのであろう。日常生活から離れて、自分の心の深奥を訪ねる旅、スピリチュアル・ツーリズム、それこそが歩き遍路の世界であるように思える。

光があれば陰があるように、日常生活とお遍路（スピリチュアリティ）は、おそらく相補関係にあるのだと思う。WHOが健康の定義に「スピリチュアルな安寧」をつけ加える提案をしたように、魂の安寧こそよき社会生活を営むための基礎である。「四国があつてよかった。『心の避難所』があつてよかった」とは、ある若いお遍路さんのことばである。今回、スピリチュアル・ツーリズムというテーマでお遍路の実態を調べてみて、あらためて、お遍路がいかに日本人の精神生活に大きな役割を果たしてきたかを再認識させられた。

謝辞

本稿は、歩き遍路の方々の貴重な情報のおかげで書くことができました。「お遍路情報交換日記」に書き込みをしてくださったお遍路のみなさん、そして情報提供してくださった「住友産業保養所なべいわ荘」のご主人・ご家族のみなさんに、心から感謝申し上げます。

引用文献

- 石山未巳『幸せはどこにある：白血病を宝に変えた歩き遍路』（新風社），
2002
岡哲行『スペイン巡礼史：「地の果ての聖地」を辿る』（講談社現代新書），
2006
小林淳宏『定年からは同行二人』（PHP研究書），1990

四国のスピリチュアル・ツーリズム

佐藤久光『遍路と巡礼の社会学』（人文書院），2004

島蘭進『精神世界のゆくえ：現代世界と新霊性運動』（東京堂出版），
1996

鈴木大拙『鈴木大拙全集・第八巻』（岩波書店），1968

須藤元気『幸福論』（ネコ・パブリッシング），2005

高橋和夫「鈴木大拙の『霊性』の概念について」，日本スウェーデンボ
ルグ協会編『スウェーデンボルグを読み解く』（春風社），2007

高群逸枝『娘巡礼記』（岩波文庫），2004

月岡祐紀子『平成娘巡礼記』（文芸春秋），2002

森正人『四国遍路の近現代：「モダン遍路」から「癒しの旅」まで』（創
元社），2005